

公益社団法人都城青年会議所

2017年度 理事長所信

第54代理事長

吉原政秀

【スローガン】

将来を掴み取れ!! ～ Do One's Best ～

【基本方針】

1. 自己実現による変革運動
2. 特異性によるファンづくり
3. 考え方と技術による経営力の向上
4. 生きる力による青少年の育成
5. 地方創生の本質によるまちづくり

【はじめに】

「将来を掴み取ろうとする行動そのものが、生きるということ」

J Cという組織は、自分がやりたいと思った考えが自己実現できること、に最大の価値があります。そして、自分の可能性を最大限に開発して実現していくその中で、各々の最善を尽くす行動を通してこそ、J C運動の行動綱領であるJ C三信条、つまり「修練」による個人の様々な成長が生まれ、周囲により貢献でき得る存在になり、「奉仕」による社会の豊かさが生まれ、自分が役に立つ喜びを感じて自身の心が豊かになり、それらのことから何よりも強い絆が生まれ、真の「友情」が育まれていくことで意識変革の輪が広がり、結果的に「明るい豊かな社会」が実現されていきます。そして、J Cの大きな特徴の1つが、単年度制です。他に単年で任期を更新する組織を私は知りません。その組織で最も能力が高く経験のある者が何年でも役員を担当すれば、確実に運動は成長していきますので、まちづくりの視点のみで考えると、単年度制は非常に効率が悪いということになります。つまりJ Cは、ひとづくりの方に、比較的、重きが置かれた組織なのです。

人は自分がやりたい事をする時、疲れを感じません。それは蝶を追っていて、いつの間にか山頂に登っているような感覚で、そのことをやれるのが報酬になるからです。かつては、定数を超える方が委員長選挙に手を挙げて、惜しくも落選された方は涙を流されていました。企画を始める自由があれば、企画が終わる自由もありますし、その逆もまた然りです。継続することの良さの裏側には、まだ見ぬ魅力的な企画の機会損失があります。あらゆる物事にメリットとデメリットがありますので、両立できないのであれば、優先順位をつけなければなりませんし、それを決める根拠は、「変革の能動者」である私たちJ Cメンバーが、魚を施すのではなくて魚の釣り方を伝えることによって、「積極的な変化の創造」をするという、J Cの基本に基づく必要があります。また、公益法人格を死守することがJ C

の目的ではありませんので、公益法人格を守るための企画を行うということがあれば、それは本末転倒になります。取得の本来の目的である J C 運動の進化、あるいはこれまでに述べてきました原理原則に基づくと、例え企画の規模は小さくても、それぞれの積み重ねで公益性のある組織を維持する理想に、青年らしく最善を尽くさなければなりません。そしてその際に、例えば車椅子の企画を行う場合は、車椅子支援団体へ連携を打診するといったように、企画の趣旨に合致した特色をもつ他団体の自己実現と協働する、という意味において、他団体との連携は積極的に推進すべきものであります。

時代の変化に応じて新しいことに挑戦する J C であれ。自由に企画を作り、構想を練り上げて、各所要人などへの説得・共感・根回し、組織の意思や利害を調整して、企画を推進し実現へ繋げていく。それを仲間たちと喜怒哀楽を分かち合いながら力を合わせる楽しさ。これらは子どもたちが無邪気に砂場でトンネルをつくる事と同様、大人の楽しみも本質的には何も変わりません。1年1年自由闊達でありながら、失敗をしたとしても志高く各々がその年の最善を尽くし、J C の綱領にある「英知」と「勇氣」と「情熱」を総動員しながら、私たちに主体性のある運動を通して、より活気に満ちた組織へ成長することで、この組織の魅力と、社会への貢献とが相乗効果で力強く高まっていくと共に、それらは副次的に会員拡大の動機づけへ大きく繋がっていき、継続で行う従来の拡大活動へも確かな後押しとすることができます。

一方で、自主自立の精神とは、何でも好き勝手に思いつきで行動していいという事では決してありません。まずは先輩方が築き、受け継がれてきた伝統が基となった規律・規範は、時代の変化に寛容でありながらも、メンバーの帰属意識を醸成し、連帯感や使命感を確保して、各々の持つ力を集約するために必要不可欠です。やるべきことをやり、自分を律することの先に、為すべきことをなす自由があります。そして、古来より道を極めようとする際の順序を示した考え方として「守破離」があります。守とは教えを守り、自らの考えを入れることなく、ひたすら基本を身に付ける。破とは守の殻を破り、今までの学びを基礎としながら、自らの知識や個性を発揮する。離とは様々な修練の結果、思いのままに行動して、自由に自らの真価を発揮する。同様に J C にも調査・分析・企画・実施・評価という 5 サイクルがあるように、その年その年の理事長が示す大きな方針の枠組み内からすぐさま企画に手を伸ばすのではなく、守に値する徹底的な調査と分析を経た上で、自分ならこうしたい、という破や離の順序を踏んでこそ、地に足の着いた実りある変革運動を可能にしていきます。

【組織力】

「特異性によるファンづくり」

組織のルールというものは、どのような時代でも変わらない本質的なこと、そのような守るべき精神性や行動指針を基礎として、刻々と変化する全ての物事に対する時代ごとの新しい価値観を捉えることにより、新たな変革が獲得され、更にその中から原理原則が抽出されていくという、不易流行の考え方があるべき姿です。法令遵守はもちろんのこと、組織の円滑な運営や活性化には、定款・諸規程という成文律や、規律・規範といった不文律を含めて、それらがより定着するためにも、その都度、丁寧な調査・分析を行い、追加・削除・修正を検討する場をもつことを阻まないことが重要になってきます。

そして、都城 J C の魅力を更に引き立てるためには、ブランディングが必要不可欠です。ブランディングとは、自らの強みや特徴を見いだして、その価値を理解してくれる人を創りだす、つまり「ファン

づくり」のことで、す。ですから、単に宣伝をすればブランディングが向上する訳ではないので、一般的に言うところの広報とは分けて考えなければなりません。私たちがどういう考えをもっている団体なのか、通り一辺倒な内容を単に伝えるだけではなくて、その価値をより認知してもらえることに注力することで、受け手と心が響き合うような相互関係を築いて、より多くの賛同者を得ることで、私たちの活動をさらに活性化する仕組みを構築することができます。

ブルーオーシャンとは、ライバルがいない新規市場のことを示すマーケティング用語のひとつです。ファンになってもらうためには、その組織でなくてはならない理由が必要なことも大きな要因になります。つまり、選ばれるためには、他のものと被っていない何かが必要なのです。数ある各種団体のレッドオーシャンの中から、どのようにしたらブルーオーシャンへもっていけるのでしょうか。それは紛れもなく、単年度制で企画が自己実現できる、という J C 最大の特異性を中心とした、前章で述べた数々の内容であります。そして、それらを効果的に認知してもらうブランディングに画一的なものではなく、様々な成功事例や失敗事例から、都城 J C に相応しいブランディング戦略を実践する必要があります。

例えば、多くの企業が参加者を広く募って、見込み客を創りだすためのセミナーを行うようなことを重ねることによって、私たちのそれぞれの企画への参加者増加はもちろんのこと、参画者の増加や会員拡大の一助となり、ひいてはメンバーが J C バッジを付けて活動していくことに誇りを感じるといった、永続的に組織を存続させて、地域での存在価値を高めていく、組織運営の強化に繋がっていきます。

【経営力】

「先人の足跡を求めるのではなく、先人が求めたところを求める」

経営とは、組織を運営することを言います。即ち、人の幸せを目的とし、利益の追求を当面の目標として、組織を有効的に運用すること、と言い換えられます。そして、いつの時代、どんな時代であったとしても、伸びる組織は伸びますし、滞る組織は滞ります。それは、外部環境が良い時は伸びる組織が多く滞る組織は少ない、逆に外部環境が悪い時は伸びる組織が少なく滞る組織が多いだけ、ということに過ぎないことをまずは深く認識しなければなりません。その全ての成果、つまり、為すべきことをなした結果というものは常に、「情熱」と「技術」と「考え方」の3つの要素で決まります。この3つの要素は、どれが欠けても十分な成果を得られません、この中で最も大切なのが考え方です。なぜなら、情熱と技術は100から0までの指標があるのに対して、考え方というものは、100からマイナス100までの指標があるからです。過去の歴史を振り返れば、組織のトップあるいは、その組織に属する人の情熱と技術は十分であったにも関わらず、考え方を誤ったばかりに消えていった組織というものが数多くあります。古くは孫子の兵法、孔子の論語に始まって、もしドラのドラッカーやパナソニックの松下幸之助氏などに至るまで、まずは先人たちの多くの失敗・成功の経験からくる知恵をもって、物事に対する考え方のぶれない軸を打ち立てる必要があります。

そして、ここで注意しなければならないことがあります。それは、学びとは知識が増えることではなくて、自分自身が今置かれている環境の中で、それをどう使えるのかに落とし込んで考えた上で、行動に移すものだということです。使っていない学びは、知らないことと同じことです。ですから、学ぶ際には、自分が今抱えている問題や、今目指している目標にとって、1つ1つの内容がどう当てはまるのかを自分の頭で考えて実践する、ということ強く心がけなければなりません。それがないと、まるで

自分が考えたかのように錯覚して満足してしまいます。学んでも自分の頭で考えなければ、頭の中が整理されず、本質は分かりませんし、考えるばかりで学ぶことがなければ、独りよがりになりがちで危ない、ということを経験しながら、物事の考え方を磨かなければなりません。

会議力、具体化力、計画力、継続力、傾聴力、交渉力、行動力、雑談力、時間力、自己表現力、叱責力、質問力、準備力、称賛力、素直力、責任力、先見力、抽象化力、徹底力、鈍感力、俯瞰力、分析力、変化力、本質把握力、面談力、模倣力、誘導力、論理的思考力、等々。成果を出す上で必要とされる技術には、枚挙にいとまがありません。更に深掘りすれば、財務諸表を経営的な観点で読み解くことなども技術の1つと言えるでしょう。例えば、自己表現力についてですが、心に良い考え方があればいいというものではなく、良い考え方があればその考え方を伝える術をもたなければなりません。その中でも、JCに入ったからには人前で話ができるようになりたい、と考えている人が多いかと思います。その為には、いかに回数を増やすかが大きな要素を占めているにも関わらず、年に数回、人前で話をして上手く話せず、動機づけには良いかもしれませんが、苦手意識だけを与えてしまえば本末転倒になりかねません。例えば、最初は5人程度の前で、30秒間の話をすることを繰り返せば、失敗してもすぐに挽回の機会が訪れて、更にそれを圧倒的な回数行うことによって習熟度が上がっていき、徐々に人数と時間を増やしていく。以上は一例ですが、そのように成果を意識した実践的な狙いをもって、それぞれのあらゆる技術を向上させていくことが重要であります。

自分が自分にできる最大の奉仕は、磨かれる環境に自分を置き、甘やかさず錆付かせないことです。そして、真に強い人は弱いところがない人ではなく、弱いところがあっても目をそらさずに、じっと向き合っていく人です。生涯を通じて成長の道を歩み、命尽きる最期の一瞬まで学びの歩みを続け、将来を掴み取っていきましょう。

【青少年】

「与える教育だけでなく、引き出す教育による生きる力を」

子どもの幸せな人生を願わない親はいませんが、世の中は、理想通りではなく理不尽なことも多くあったり、正しい意見が常に通るとは限らなかつたりと、実に様々な人間関係が渦巻いています。それらに対して、背を向けて後ろ向きに人生を歩むのは簡単ですが、厳しい状況に放り出されたとしても自分の心を奮い立たせる強い気持ちをもって、何とか乗り越えていく力を身につけてやりたい、と誰もが思うでしょう。しかしながら現代においてテレビやゲームなどの受け身なもの、つまり与えてくれるものに慣れてしまうと、それらに必要な主体性が育まれません。善し悪しの基準は最終的に自分で決めるものですし、幸せは自分の心が決めるものなのに、人が行う事を常に気にして、様々な判断を他の人の価値観に合わせるような決定をしてしまうので、自分の選択に自信がもてなくなります。すると、不平不満が日常化したり、物を手に入れることで安心したりするようになり、幸せから遠ざかってしまいます。

同様に、一流大学を出て一流企業に就職すれば一生が保障されるという、右肩上がりの経済成長をしていた時代は終わりました。確かに、受験という目標に向かって、自分で勉強の計画を立てて実行していく力や、断続的な緊張に耐える力は、どのような仕事をするにしても役立つ普遍的な力です。教科においても、国語の日本語能力は全ての基本になりますし、数学はプロセスを正しく行うことで答えが合うという論理性が訓練され、社会や理科は、人類が歩んできた発見の集積を知ることができます。しか

し、これら受験だけで通用する限られた幅の学力だけでは、もはや現代社会を生き抜くことは難しくなりました。

英語の教育“education”は、ラテン語の“educare”「引き出す」が語源になっています。問題を解決する力、論理的に思考する力、行動に移せる実践力の3つを軸にしながら、意欲的に自主性をもって取り組むこと、試行錯誤しながら考えること、集団において適切な協調性をもつこと、決めた目的に向かって挑戦して自己実現することなどが挙げられますが、それらを大人は上手く引き出し、よく見て褒めるのではなく認めることで、伸ばしてあげることが大切です。

具体的な例を挙げますと、しっかりと自分の考えを言葉で表現して相手に伝えられる力があります。話し合いをすればディスカッション力が向上するということはありません。意見や質問には、質の善し悪しがあるという明確な認識が必要です。筋道を立てて、論理的に骨子を要約して話す力や、どの意見や質問によって、話し合いが生産的になったかを見極める力を育てることによって、話し合いの質も高まっていきます。あるいは、周りの人の動きをよく見て次の展開を予測し、自分がどう動けばいいのかを考えられる、段取りを組める力があります。言われたことだけを行っているだけでは良い成果は生まれません。予測が不透明な状況であっても、自分の行動の意味を大きな全体の中で捉え直して、人と関わりながら場を形成していくことによって、より良い現実を作り出していくことができます。

そして、ここで注意すべきなのは、行うそれらの取り組みを通して、どのような力を身に付けさせることができるのかという目的を明確にしなければ放任と同じで、自然と成果が発生していくことが連鎖するに任せるような、散漫な時間となってしまうかねません。結果としてなんとなく力をつける、ということではなく、今この力を伸ばしているのだという意識を共有し、その効果的な環境をつくる中でバランスよく静と動の視点から生きる力を伸ばしていくことが、子どもたちが将来を掴み取ることに繋がっていきます。

【まちづくり】

「地方創生の本質に対して、JCは何をできるのか」

政策提言機関である日本創生会議が896の市町村を消滅可能性都市と公表しました。その自治体消滅論の趣旨は、少子高齢化、若年層の流出、労働人口の減少、市街地の空洞化、再開発の難航などから収入も減少、消費が冷え込んでスケールメリットが働かなくなり、公共サービスの一人当たりの負担が重くなると維持が困難になり住みにくい地域になるので、さらに人が外へ出ていくという人口減少のスパイラルから脱することができなくなる、というものであります。そして、政府はそれを受けて、未然に防ぐ取り組みを行うために地方創生を重要課題として掲げて、まち・ひと・しごと創生本部の設置を決定しました。その目的は、地方において仕事人が人を呼び、人が仕事を創り出す好「循環」を確立して、地方への新たな人の流れを生み出すことで、その好循環を支えるまちに活力を取り戻すことができる、というものです。

では、何をもちって地方が活性化したと言えるでしょうか。特にまちづくりにおいて、過去の常識は今の非常識と言われていますが、人がたくさんいて、まちに活気に溢れている、という漠然としたイメージだけであれば、イベントを行えばよいと考えてしまいがちです。確かにイベントを行えば、地元の人たちの絆を深めたり、地域を元気づけたりすることができ、それはとても意義ある大切な機会ですが、

それが趣旨なのであればそれは、福祉に当たります。税金を投入して一時的に人を集めて、掛けたお金以上に地元にお金が戻ってこないが、参加者が楽しかったと言えれば良いイベント、ということなのであれば、それは投資ではなく消費になってしまいます。地域活性化とは、その地域の経済をよくすることです。意味のあることをやっているから赤字でもよいという認識であれば、それは地域を衰退させることに繋がりがねませんし、イベントを行えば人が集まって勝手に活性化するだろう、という考えであれば、それはイベントが手段ではなく目的であるという、いわゆる手段の目的化になっている状態です。賑わいは意図的につくるものではなくて結果的にできるものです。イベントなどのお金によって意図的に賑わいを作ろうとするのは集客であって、持続性がないのでお金をつぎ込み続けなければならない、どんなに地域活性化を声高に叫んでも、経済が循環しないので活気は生まれません。地方創生の本質は、地域経済をお金・商品・サービスが循環して、賑わいでお金を作っていくことであり、手段と目的が逆であることを理解する必要があります。

現在のところ、周りの環境で特に表立って目立った影響は少なく、日常生活にも特に支障はありませんので、今すぐどうにかしないという感情は芽生えにくいかもしれませんが、日常生活への影響がはじめてから焦っても遅いのではないのでしょうか。これからの地方では、便利さやサービスといったものの上をいく、大都市圏にはないここだけの魅力を打ち出していくことが求められます。そしてそこを深く追求して、知恵や工夫を凝らしながら、しっかりと実践していくことが、地方創生の軸になります。

ただ、魅力の内容が抽象的であれば、多くの人が共感できるかもしれませんが、何をすべきかがぼやけますし、美味しい農畜産物だけでは、大都市圏でもお金を払えばいくらでも手に入ることに注意しなければなりません。あるいは、軌道に乗った事業を更に引き上げる段階において、多くの人が参加をして会議を行うことは、問題を整理し意見を聞く上で有効ですが、最大公約数を取るとありふれたものができ上ってしまって、誰からも強い不満こそ出ないものの、少しでも尖ったものを打ち出さないで成果は上がりません。ですから、最初は数人で構わないのです。むしろ、まちの変化を起こすのに、数人では難しい大それたことを考えるのは、逆効果だったりします。地域活性化で成果を上げるのは、一致団結した大集団より、覚悟を決めた少人数のグループです。

それらを踏まえた上で、立ち上げ時は除きますが、外部に頼むのではなくて、資金に限りがあっても小さくても、内発的にしっかりお金が回ることを目的として、固定観念をいかに捨てて、できることに挑戦をしたり、小さくとも実践をしたりすることが大切です。もちろん失敗もあるでしょうが、そこであきらめず試行錯誤を続けて、後に続く人たちのために自らが得た知恵をしっかりと伝えていけば、必ず結果も伴っていくはずで、これからの地域のあり方を官民が一体となって切り拓いていくことで、故郷の将来を掴み取っていきましょう。

【結びに】

「今日は残りの人生の最初の1日」

誰もがみな、自分の人生をもっとよくしたいし、なりたい自分があって、そのコツを知りたいと思っていますが、なかなか変えられなくて後ろ向きになってしまうことがあるかもしれません。そのような時は、人生は変えるものではなくて、いずれ変わるものだ、と考えると、気持ちに少しゆとりがでます。また、健全な自己否定とは、半分の水が入ったコップを自らに見立てて、半分も入っていると満

足し安住するのではなく、半分しか入っていないと気を揉みながら満杯を目指すのではなく、半分も入っていると心豊かな状態で満杯を目指すことです。

そういった心の在り方でいながら、あとは自分ができないこと、正確には自分ができないと思っていることに最善を尽くして行動していくことが大切です。確かに挑戦とは、ワクワクすると同時に怖くもある存在ですし、全てうまくいくとは限りませんが、挑戦したという充実感が得られますし、それによって成長することができます。更には、新しいことに挑戦して、変化を歓迎することを習慣にしていれば、必ずその不安は小さくなります。

ではその行動をいつから始めるのかということですが、人生がよくなるために行動するのは、明日でもなく来週でもない今日ですし、人生はマラソンに例えられることもあります。人生は100m走の連続で今日1日しかありません。大事なことは、大切な人生の一瞬一瞬の時間をこの都城JCで生きると、私たちは自分で決めた、ということではないでしょうか。その強い想いを忘れずに、日々のJC活動から何を持ち帰ることができるのかを、常に考えながら行動を積み重ねていくことで、水を注ぎ続けたコップから行動の貯金一杯になった瞬間に、溢れてくる人生の変化が必ず訪れます。

また、JCICリードの最後の文章に、人生において最高の仕事とは人にサービスを提供すること、とあります。つまり人生の最大の喜びは、自分が他の人の役に立っていると知ることであって、自分の時間と能力を他の人に提供することは、非常に価値のあることです。そして、先輩方が築いてこられた歴史と伝統を胸に、今のJC運動が行えている喜びを噛みしめながら、家族や会社からの支えに対する感謝を決して忘れてはなりません。それらの気持ちを根底にもちつつ、この故郷を本当に愛して、成長したいと真剣に願う若者が集い、切磋琢磨する自分磨きの場、都城JCで、自分の成長や人の役に立っていることを喜んで、そのことについて仲間と語り合えるような、より活気ある組織を目指し、共に力強く一致団結して、最善を尽くす行動から、あらゆる将来を掴み取っていきましょう！！